

# 加藤善平さんという人

善平さんは天保十二年（一八四一）に、当時の上阿井町で生まれた。子どもの頃からなかなかの利口者で、しかも物事に熱中する性格であった。年若い頃は内谷の櫻井家にやとわれて野土の鋤場につとめ手代として働いたこともあったが、明治初年頃には寺子屋の手習い師匠となって、下阿井長栄寺で村の子ども達に読み書きそろばんを教えた。

めとつた妻には年若くして先立たれたため、妻の追善供養と冥福を祈って自ら石州の龍昌寺に赴き、住職に懇願して同寺の徒弟となった。剃髪して康教と改名して仏陀の道に入り精進を続けた。時に齡五十八であった。

久しく龍昌寺にあって修行を積んでいたが、たまたま明治初年に火災のために本堂を焼失していた下阿井井戸の禅隆寺を再建する話が持ち上がった。善平さんは請われて阿井に帰り、禅隆寺復興につくし再建と共に道心として同寺の住職を務めた。その後六十五才に至って長老に昇進した。

禅隆寺は長栄寺第五世住職孫徹翁林髓和尚が隠居寺としていたこともあっただけに、古くより風流人のたまり場として、仁多俳諧の発祥の地として知られていた。俳人として有名な石州大田出身の中島魚坊や阿井の路考、さらに曹洞宗賢徳の誉高い傑僧で三河国の宝積寺の許住職であった萬仞道旦（ばんじんどうたん）和尚などが遊んだところである。境内には巾一米、高さ一米半に及ぶ芭蕉塚があり、「蛙川か」と大書されている。近くには風雅な池も残っている。

善平さんは道心をつとめながら歌人としても高く評価される俳号を長孝という俳諧師でもあった。丹念に書き残された歌集には一三二〇吟もの歌が載っている。

これらは時に接し折に触れて、思いのまま書かれたもので、その数句をひろってみると次のようなのがあって、善平さんを偲ぶことができる。

- 「灌仏や甘茶呑む子も皆仏」「雪ながら春立にけり野に山に」
- 「梅だけは春の支度や年の内」「事とへば何も答えぬ案山子哉」
- 「養生を常にして置け葉喰い」「竹一葉降って書物の葉かな」
- 「うれしくも神の恵みや風かほる」「人里はまだ程遠し閑古鳥」
- 「弓張りの月掛りけり糸柳」「山や河越えてかかるや虹の橋」
- 「君送るや橋でわかれて夕納涼」「年の賀や主も八重の玉椿」
- 「巢に戻る（うずら）の声や夕日影」

「夕立やあとなし晴れて昼の月」  
こうした数々の歌を残して大正十一年（一九二二）三月二日、八十二才で他界した。内谷の櫻井家にやとわれていた頃の歌に次のようなものがある。

立春（たつはる）もわかぬ深山（みやま）に住みなれて  
今日鶯（うぐいす）の初音（はつね）にぞ知る  
春ともなれば櫻井家の近くの谷間では朝もまだ明けやらぬ頃  
から鶯のホーホケキヨの美声が間近に聞こえて来るのだった。  
住みなれていたものの何せ寒い深山であるだけに、善平さんは春に気付かなかつたが、今日朝から歌った鶯の初音で春になったと心から感じた  
と吟じている。

善平さんの法名は孝順法童首座で永く上阿井町の上  
に眠っている。



堀山根自治会  
井戸地区 禅隆寺跡